

信州の伝統的工芸品

内山紙

経済産業大臣指定伝統的工芸品 昭和51年6月2日指定



伝統マーク
承認番号27-314



内山紙の概要

江戸時代初期の寛文元年(1661年)に、美濃で製法を身につけた職人が自家で紙を漉いたのが始まりとされ、内山紙の名称は、その地名に起因しています。

原料には全て楮^{こうぞ}を用いており、洋紙パルプを混入しておらず、強靱で通気性、通光性、保湿力が優れているという特色を持っています。また、製造工程で、雪の上に晒すことによ

り、自然な白さが得られ、丈夫で日焼けしにくく長持ちします。

手漉き和紙として優れた品質の内山紙は、障子紙をはじめ、表具用紙、美術紙など多くの人に愛用されています。また、その特徴を活かして、照明器具など新たな商品開発も行われています。

【主要産地】

飯山市、
野沢温泉村、栄村



歴史・沿革

内山紙は江戸時代の寛文元年(1661年)に信濃国高井郡内山村(現在の長野県下高井郡木島平村内山)の萩原喜右エ門が美濃の国で製法を習得して帰郷し、自家で漉いたのが始まりと伝えられています。

原料となる楮は自生していて容易に手に入ったことから、江戸時代には広く奥信濃一帯で紙漉が行われていたようで、宝永三年(1706年)の「信濃国高井郡水内郡郷村高帳」に「紙漉運上銀二十五匁七分一原」という記載があることから江戸中期には紙製造が徴税対象の産業だったことがうかがえます。

奥信濃で紙の製造が普及し

たのは、豪雪地帯として知られる奥信濃一帯の農家の冬季の副業として適していたこと、強靱な障子紙の需要が地元や隣接する越後の国で高く現金収入に結びついたこと、そして内山紙の特徴である楮を雪にさらすために雪が役立ったことが挙げられます。

明治時代に入ると製造方法に改良が加えられ、製造工程での動力の導入などが行われます。明治42年には製造1,130戸、販売175戸、原料供給1,354戸で、長野製紙同業組合が設立されました。しかし大量生産の洋紙が普及する中、多大な労力がかかる手漉き製造

は生産効率が悪く転業が相次ぎ、同組合は昭和24年に解散しました。

残った生産者が北信内山紙工業協同組合と高水和紙手すき協同組合を設立し、昭和34年には大同団結し、名称を北信

内山紙工業協同組合と改名しました。

平成15年に現内山紙協同組合に名称変更し、現在に至ります。



産地の取組

自分で漉いた、自分の卒業証書

飯山市の小学校では、内山紙の体験をしています。地域の伝統的工芸品の素晴らしさを実際に体験しています。

その際に、自分で漉いた紙は、卒業証書となり、一生涯の思い出となっています。



内山紙の素晴らしさを他の分野でも

丈夫でありながら、透光性があることから、照明器具の開発も行っています。

丈夫な内山紙をひも状に練ることにより、内山紙による布状の製品や紐も作ることができます。



和紙照明「TIKUMA」



アクセス



●豊田飯山ICから車で20分

内山紙協同組合

〒389-2322 長野県飯山市大字瑞穂6385
TEL0269-65-2511 FAX0269-65-2601
e-mail info@uchiyama-gami.jp
URL <http://www.uchiyama-gami.jp/>

◎短冊、扇紙、丸紙



◎手帳



◎懐紙と懐紙入



◎札入、メモ帳、カード



◎便箋セット



◎絵手紙用はがき、便箋



◎ブックカバーと団扇



「雪さらし」による 自然な白さ

内山紙は、飯山を中心とした地域で生産されています。楮を原料とした和紙の中でも、その白さは大きな特長となります。

原料の楮を煮て乾燥した後、「雪さらし」を行うことにより、綺麗な白い紙を漉くことができます。

雪の恵みによる、内山紙の味わいのある自然な白さとなります。



雪さらしをした楮

◆黒皮乾燥



◆漂白前と漂白後の楮



◆漉き



◆紙床付け



【製造工程】



技

微妙な感覚と経験が、手漉き和紙の命

手漉きに使う簀^{すげ}桁も、今は貴重になっています。紙質や紙の大きさにより、様々な簀桁を使い、紙を漉きます。

一枚の紙が均一な厚さとなるように漉くためには、微妙な感覚と経験が必要となります。「紙は気を漉く」と言われるほど、その時の精神状態が反映される作業です。

作業の途中で一瞬でも手を休めると、紙の品質を保てなくなるほど、繊細で厳しい仕事です。



様々な大きさの簀桁